国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成27年1月1日発行　第39巻第1号通巻第448号

月刊みんぱく

2015 1月号

特集

ひつじ

ひつじが聖なる動物となるとき　島村一平
ゴワゴワを活かす　上羽陽子
現代に生きる古代の紙「羊皮紙」　八木健治
今年はヤギ年　樫永真佐夫
ニュージーランド、牧羊の二世紀　ピーター・マシウス

良い木陰、悪い木陰

西岡 直樹（にしおか なおき）

友人宅の庭に茂るニーム（インドセンダン）の木陰で話に興じていたときのこと、皿にのせたカップをカタカタいわせながら紅茶を運んできた友人の母親がいった。

「木陰でのおしゃべり、いいわねえ。木陰はやっぱりニームが一番！　バニヤン（ベンガルボダイジュ）もいいけど暗すぎる。タマリンドの陰は体に良くないわ」

木を、姿かたちではなくその陰で評価するとは、さすがに日差しの強烈なインドならではだと思った。木の陰の良し悪しについて語るこんな話がある。

ある女が、長旅に出かける夫を早く帰らせたいと思って賢者に相談したところ、賢者は女に「行く道はタマリンドの木陰で、帰り道はニームの木陰で昼寝をするよう夫にいえ」と告げた。

女は、賢者にいわれたとおり夫にいい、夫は妻にいわれたとおりタマリンドの木の下で午後の仮眠をとりながら旅をつづけた。すると数日のうちに病気になり、旅を断念して帰宅することになった。だが、帰りにはニームの木の下で眠ったので、家に着くまでに男の病気はすっかり良くなっていた、というのである。

効用が広く薬効も高いアーユルヴェーダの薬木ニームはインドでは知らない人はない。その陰までもが体を健康なバランスに導く力があると信じられているのである。一方、タマリンドはマメ科の高木で果実は食用となり毒樹ではないが、酸を含んだその葉が散る樹下にはなんの下草も育たない。陰惨な感じのするその木陰はどこか不吉な感じがするのである。

タマリンドよりもっと悪いのはシチョウジュ（七葉樹）で、その木陰で眠ると死んでしまうとさえいわれている。キョウチクトウ科の常緑高木で、深く涼しい木陰を提供してくれるが、秋になって花が咲きだすと、その臭いがあまりにも強烈なので、だれもがそこから逃げ出したくなる。花後に結ぶ莢（さや）も裂けて山姥（やまんば）の髪のように長くたれ下がる。そういうことからだろうか、この木はシャイターン（サタン）と呼ばれて、西ガート山脈に住む部族の人たちはその陰を踏むことさえも嫌うという。

こういう話を聞くと、私たちは、人のお蔭（かげ）もさることながら、木々のお陰をもおおいに被って生きていることに気づかされる。

プロフィール
1946年宮崎県生まれ。宇都宮大学農学部卒業後インド西ベンガル州に留学。村々をめぐり、昔話や植物の話を集める。著書に『インド花綴り』（木犀社）、『インドの樹、ベンガルの大地』（講談社文庫）、『サラソウジュの木の下で』（平凡社）、『ネパール・インドの聖なる植物』（八坂書房）、『サンタルのもりのおおきなき』（福音館書店）などがある。

月刊 みんぱく
1月号目次

1 エッセイ　千字文
良い木陰、悪い木陰
西岡 直樹

特集 ひつじ

2 ひつじが聖なる動物となるとき
——モンゴル・ブリヤートのシャーマニズム儀礼
島村 一平

4 ゴワゴワを活かす
——ネパールの羊毛加工から
上羽 陽子

6 現代に生きる古代の紙「羊皮紙」
八木 健治

7 今年はヤギ年
樫永 真佐夫

8 ニュージーランド、牧羊の二世紀
ピーター・マシウス

10 集めてみました世界の○○
門飾り編
菅瀬 晶子

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
踊る獅子
——埼田神社の青獅子舞
笹原 亮二

16 多文化をあきなう
ソーシャル消費と認証制度
長坂 寿久

18 味の根っこ
バーラ
南 真木人

20 人間学のキーワード
サバルタン
井坂 理穂

21 異聞逸聞
もうひとつの「東海」
庄司 博史

22 制服の世界、世界の制服
箱根駅伝のユニフォーム
日髙 真吾

24 次号予告・編集後記

特集

ひつじ

十二支のなかで、今年の干支であるひつじ（未）は、いささか影の薄い存在であるかもしれない。じつはみんぱくの収蔵品に、ひつじの毛や皮でつくったものはあまたあれど、ひつじそのものの姿をかたどったものは非常に少ないのである。それはこの動物が頭から尻尾まであまさず活用され、捨てる部位などないという事実を反映しているのだろうか。人類の生活に欠かすことのできないひつじにまつわる、さまざまな物語をお楽しみいただきたい。

ひつじが聖なる動物となるとき
――モンゴル・ブリヤートのシャーマニズム儀礼

島村一平（しまむらいっぺい）　滋賀県立大学准教授

家畜に過ぎないけもの

遊牧を基層文化にもつモンゴルの人びとにとって、ひつじとはひとえに「食用家畜」である。遊牧民は、毎日のようにひつじ肉入りのうどんを食する。ひつじは、彼らにとって食料以上でもなければ、それ以下でもない。これに対してかつてモンゴルやシベリアの狩猟・牧畜民たちが森の主や精霊として崇めてきたのは、鹿や熊、鷲（わし）といった野生の動物である。こうした野生獣は、食物連鎖の頂点周辺に位置し触れがたき存在（可食可能性の低い貴重な食料）であるがゆえに「聖なる動物」であったのだろう。しかし、ひつじは家畜に過ぎない。家畜は、人間の管理下にあるがゆえに敬意を表されることもなければ、「神の使い」として崇敬の対象となることもないのである。

そんなひつじが「野生獣」並みの扱いを受けて「聖なる動物」と化する瞬間がある。それが、シャーマンのイニシエーションのなかでおこなわれる供儀儀礼のときである。

ひつじを放牧に出す遊牧民。2005年、モンゴル国ドルノド県

上：シャーマン儀礼においてひつじを屠る少年。2000年、モンゴル国ドルノド県
下：冬。食用のひつじを運ぶブリヤートの男たち。2001年

捧げられるひつじ

ロシアの東シベリアからモンゴル、中国内モンゴルに跨（またが）って暮らすモンゴル系のブリヤート人のあいだでは、シャーマニズムが篤（あつ）く信仰されている。このシャーマン儀礼において、ひつじは、神々や精霊たちの捧げものにされる際、通常の食用の際の屠（ほふ）り方とは異なり、「聖なる野生動物」として扱われるのである。

儀礼において、ひつじはまず香で清められたのち、椀に入った牛乳を飲まされる。次に四本の蹄（ひづめ）とこめかみにバターが塗りつけられる。それからひつじはフェルトの敷物の上に仰向けにさせられ腹部に牛乳がそそがれる。その後、供物係の男性がみぞおちにナイフを入れ、動脈を切断するのである。ひつじの血は腹腔（ふくくう）にたまるので血が吹き出ることもない。血は大地に一滴もこぼれることがない。このような動物の屠り方のことをモンゴル語で「ウルルフ」という。ウルルフはモンゴル遊牧民にとって伝統的な通常の食肉のための方法でもある。

シャーマニズム儀礼において通常のウルルフと異なるのは、それから先の解体のやり方である。通常はひつじが絶命した後、皮と肉のあいだにつめをたてて皮を剥（は）ぎ、頭や四本の足をナイフで切り取った後、解体を始める。ところがシャーマンの儀礼において神々や精霊に捧げられるひつじは、皮を剥がれた後、頭部とそれにつながる食道、気管、肺、心臓がつながったままの状態のものが体からすぽっと取り出されるのである。ブリヤートの人びとは、この頭と内蔵がつながったものを「ジュルド」とよぶ。ジュルドは儀礼が終わった後、食されることはなく火にくべられて神々や精霊に捧げられる。ブリヤートの狩猟・牧畜民たちは、ここに動物の魂がやどると信じてきたのである。

家畜を野生獣に

じつは、この「ジュルド」という言葉の来歴は古い。一四世紀中葉に成立した『元朝秘史』一巻の一三には、森の狩猟民たるウリヤンカイ人が鹿のジュルドと毛皮以外の焼いた肉をチンギス・ハーンの先祖のドブン・メルゲンに与えたことが記されている。ジュルドが本来、野生獣を屠るときの方法であったことを示すエピソードである。

ブリヤートのシャーマニズムの儀礼では、シャーマンの位階が上がれば上がるほど、神々に捧げるために、ジュルドにされる動物は、ひつじから馬へ、最終的には野生獣たる鹿となっていく。位階の高さが彼らにとっての「聖性」と比例していると考えるならば、鹿こそがブリヤートのシャーマンたちにとってもっとも聖なる犠牲獣だといえよう。

とまれ、ひつじはシャーマニズム儀礼においては、聖なる野生獣として屠られるのである。じつは、こうした「家畜を野生獣として扱う」習俗は、紀元前にまで遡（さかのぼ）ることができる。例えばシベリアのアルタイ山地のパジリク古墳群（紀元前五世紀）からは、鹿の角のような頭飾りで飾りたてられた馬の遺骸が発見されている。家畜をわざわざ野生獣とみなしているという点において、「鹿化した馬」はひつじのジュルドに通底する発想法だといえよう。

翻って現在、ブリヤートの人びとは、ひつじを家畜としてあしらいながらも、その一方で野生獣のように聖なる命が宿っているとみなしている。彼らは今なお、そうしたアルカイックな感覚をもちあわせているのかもしれない。

鹿化した馬。
R. Rolle, *The World of the Scythians*, Batsford: London 1989＜Horse no.10＞より

ゴワゴワを活かす
――ネパールの羊毛加工から

上羽（うえば） 陽子（ようこ）
民博 文化資源研究センター

硬いバルワール種の羊毛

ヒツジの毛というと、わたしたちは柔らかい羊毛製品を思い浮かべるかもしれない。それらの多くは品種改良されてきたスペイン原産のメリノ種である。

一方で、ゴワゴワとした粗い毛の利用というものも世界各地でみることができる。それらは、おもに肉や乳、油、皮などを販売目的として飼養されているヒツジ種である。そのため、毛の品種改良はすすんでおらず、粗毛であるが、副産物として利用されている。

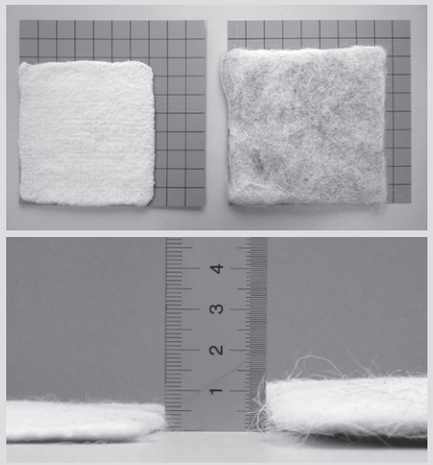
例えば、東ネパールでは、牧畜民が着用する羊毛製の防寒防雨具や敷物がある。このヒツジはバルワール種とよばれる品種で、標高四〇〇〇メートルのヒマラヤ高地から標高六五〇メートルのアッサムまで分布している。この種は、おもに肉の利用を目的として飼養される。そのため、バルワール種の毛は、メリノ種に比べると短く硬くてガサガサしており、メリノ種のように、柔らかな糸をつくることは不可能である。しかし、バルワール種を飼養しているグルンの人びとは、この毛の特性を活（い）かして、刈りとった毛で糸を紡ぎ、「織フェルト技術」で、防寒具や敷物を製作し、副業として現金収入を得ている。

圧縮フェルトと織フェルト

フェルトとは羊毛をはじめとする動物繊維に、熱、水分、圧力、摩擦による刺激を加えて、繊維同士を絡み合わせて、縮絨（しゅくじゅう）（フェルト化）し、シート状にしたものをさす。イランやモンゴルなどで広くおこなわれているのは、繊維を重ねて層にして縮絨する圧縮フェルトである。ネパールなどにみられるのは、織ってから縮絨する織フェルトである。

バルワール種の毛で紡いだ糸で敷物を織るグルン女性

織り上がった布を、熱湯をかけながらフェルト化してゆく



メリノ種とバルワール種の縮絨率比較実験（20グラム、20×20cm）
（左）メリノ種　15cm×15.5cm（縮絨率 25％）厚さ0.6cm
（右）バルワール種　16cm×17cm（縮絨率 15〜20％）厚さ1.3cm

圧縮フェルトは、仕上がりの形を想定し、繊維を重ねて層をつくりながら縮絨してゆく。大きなものをつくるには、スペースと人手が必要である。一方、織フェルトは、糸にする手間はかかるものの、狭い空間でかつ一人でできる。村に残って農作業しながら留守を預かる女性たちにとって、農閑期の副業としてはもってこいの技術である。

また、柔らかくしなやかなメリノ種は、圧縮フェルト技術でも、縮絨する比率が高く、固くしっかりとした布状となる。一方、バルワール種は、繊維の絡み合いが少ないため、縮絨率が低く、圧縮フェルトにすると、ふんわりとやわらかい布状になってしまうため、敷物としての強度がない。

短所を長所にする

グルンの女性たちは、このバルワール種の特性を活かして、織りフェルト技術によって防寒着や敷物を製作しているのだ。バルワール種は、繊維が硬くて太いので、糸も太くなり、それを織ると織り目が粗い布ができる。さらにその後、織り上げた布に、熱湯をかけながら、何時間も足でもみほぐす。すると、繊維と繊維が絡まりあって、固くしっかりとした布状へと変化する。

バルワール種でつくった布は、メリノ種のものと比べて、粗毛独特の厚みと弾力があり、雨もはじくという利点がある。グルンの人びとは、繊維利用に不向きなバルワール種の欠点を、織フェルトという技術を選択することによって長所に変え、その特性を活かした布つくりを実践しているのだ。

副業として製作した敷物や防寒着を定期市で販売するグルンの仲介人

現代に生きる古代の紙「羊皮紙」

八木（やぎ） 健治（けんじ）　羊皮紙工房主宰

電動グラインダーで削る現代の工場（イスラエルのベト・シェメシュ）

ベルガマ（ペルガモン）の羊皮紙ショップ

羊皮紙でできたトーラー（奥）、メズザー（右）、テフィリン（左）。筆者蔵

歴史を変えた羊の紙

動物園の「ふれあい広場」でモコモコの羊に触れて、「そうだ、ここに文字を書こう！」と思うだろうか。この突拍子もない発想を形にし、本の歴史に一大革命を起こしたのが、紀元前二世紀のペルガモン（現トルコのベルガマ）であると言われている。羊皮紙の発祥については諸説あるが、元々パピルスをエジプトから輸入していたペルガモンが、パピルスの輸出停止に伴い、仕方なく動物の皮に文字を書いたという。その後羊皮紙はパピルスを駆逐して約千五百年ものあいだ、西洋におけるおもな書写素材として利用されてきた。製紙法の発展と一五世紀の印刷術の発明により、製造に時間と手間のかかる羊皮紙は衰退していった。

羊皮紙づくり

羊皮紙づくりは過酷だ。わたしは北海道の牧場から羊の生皮をとりよせて羊皮紙を作り販売していたが、手作業では労力のかかるキツイ仕事である。生皮を石灰水に約一週間漬けておくと表皮が分解されて毛が抜ける。すっぱいニオイの腐敗臭に耐えながら毛をムシムシと剥（は）いでゆく。脱毛した皮を再度石灰につけて脂を抜き、木枠に張りつけて半円ナイフで肉や脂肪をこそげとる。全身を使った上下運動で案外体力を使う作業だ。乾燥後、穴を空けないよう細心の注意を払い、軽石などで磨いて薄く滑らかにする。毛と肉と脂肪に覆われていた分厚い皮が、最終的にはペラペラな「紙」になるのだ。A4サイズが約六枚とれる一頭分を仕上げるのに約一か月かかる。二万円近くで販売しても、手作業では時給にすると五百円にも満たない。羊皮紙が紙に駆逐されたのも大いに納得できる。逆にこの素材が紀元前から千五百年以上使われ続けていたほうが不思議だ。

現代の羊皮紙大国

羊皮紙は絶滅してしまったのであろうか。いや、現在でも使用されている場所がある。イギリス国会では法案を羊皮紙に印刷して保管する。エリザベス女王のスピーチ原稿、ウィリアム王子の結婚証明書も羊皮紙だ。バチカンの教皇庁も現役の羊皮紙ユーザーである。今世界には、筆者が調べた範囲で約三十か所の羊皮紙製造所がある。その多くはヨーロッパだが、十数か所集まっている国がある。それはイスラエルだ。

ユダヤ教の経典「トーラー」をはじめ、旧約聖書エステル記の巻物、ユダヤ教徒の家の玄関にとりつけられている「メズザー」という護符、敬虔（けいけん）なユダヤ教徒が額と腕につけている黒い小箱「テフィリン」に入っている極小の巻物、それらすべてが今でも羊皮紙で作られ、使用されているのだ。エルサレムの街を歩いていると、土産屋にも羊皮紙の巻物やアート作品が売られている。普通の紙とさほど変わらないため、意識していないと見過ごしてしまう。ユダヤ教には羊皮紙作成に関する宗教的規定がある。その規定に則（のっと）って作られた羊皮紙のみが「クラフ・コシェル（清浄な羊皮紙）」として使用される。見学したベト・シェメシュの羊皮紙工場では、通常の羊皮紙は三か月乾燥、トーラー用は半年乾燥し「熟成」させるのだそうだ。宗教的規定を守りつつも、すべて手作業ではビジネスとして成り立たない。この工場では大型マシンで一瞬にして毛を剥ぎ肉を削ぎ、電動グラインダーで薄く削り、イタリア製の研磨機で最終仕上げをおこなっている。

日本での動き

現在、わたしは羊皮紙の輸入販売に携わるなかで、日本でも羊皮紙の利用が着実に増えていることを実感している。西洋古典技法の作品制作だけでなく、現代アートや日本の伝統工芸の素材として、またファッションやインテリアの分野で「古くて新しい素材」として実験的にではあるが使われ始めている。また北海道で廃棄処分の憂き目にあっている羊の皮を、羊皮紙として地域の特産品にしようという動きも出ている。ひつじ年の今年は、「ひつじのまち」として知られる北海道士別市の有志が、羊皮紙発祥の地ペルガモンを訪問し、羊皮紙を通じた交流を図る予定である。羊皮紙は二千年経った今でも新しい形で生き続けている。

エルサレムの羊皮紙アート（右は筆者）

今年はヤギ年

樫永 真佐夫　民博 研究戦略センター

東南アジアの「未」はヤギ

周知のとおり、日本の十二支にネコはない。しかし中国でもベトナムでも「卯」はウサギではなく、ネコだ。「未」だってどこでもヒツジだと思っていると大間違い。ベトナム、ラオス、タイでは、なんとヤギなのだ。

ベトナム民間文化研究所のチュー・スアン・ザオ氏に訊いたところ、「未」がヤギである由来譚などはとくに思いあたらないと言う。古来ベトナムにヒツジがいなくて、ヤギしか飼養しなかったからだろうか。それなら日本の十二支にトラやヒツジがいるのも奇妙だ。だが日本で「亥」がブタからイノシシになったように、ベトナムではヤギが栄えあるヒツジの代役を仰せつかったのだろうか。はっきりしたことはわからない。

大人の食事

多民族国家ベトナムの西北部にくらし、タイ語系のことばを話す黒タイ、白タイのあいだでも、十二支は暦、祈禱、呪術に用いられている。かれらは十二支の八番目を「モット」とよぶ。日常語で「蟻」を意味する語だ。しかし、なぜか十二支ではベトナム語の「未」にあたり、だからヤギだと理解されている。

ではヤギはベトナムで人びとの生活とどのようにかかわっているのだろうか。

海岸平野の村落で、ヤギはあまり見ない。むしろ丘陵地や山地で、少数民族の村人が放し飼いしているのを見ることが多い。ベトナム人にとって日常食というより、どちらかというと精力増強効果のあるごちそうであり、大人の食事だ。焼いたり、茹でたり、鍋にしたり、調理法はさまざまである。

そういえば、こんなヤギとのつながりを思い出した。ベトナムでナスと言えば、ふつう白くて丸い小ナスのことだ。では、日本でよくみるあのナスは？　これも精力がつくのか、ベトナム語でも黒タイ語でも「ヤギのきんたまナス！」。

夢での再会

もう一五年以上前、黒タイの村における思い出である。村の長老が、夢で青春時代に愛し合った女性に再会した。遠くの村で家族をつくり、すでに亡くなっていた彼女の供養のために、長老は儀礼を開催した。

三日三晩続く儀礼のクライマックスは、ヤギの供犠だった。祈禱師に招かれた良い精霊、悪い精霊、魑魅魍魎すべてが集合している深夜の戸外で、村人がヤギの頸動脈に刃を立てる。生き血に塩を入れた茶碗ひとつを、儀礼の参加者が順番に回し飲む。いつまでも唇に残る生ぬるい血糊の不快さは、しかし村の一員として受け入れてもらっている満足にくらべれば小さいものだった。

懐中電灯の明かりだけでヤギを供犠する

ベトナムの山地で放し飼いされているヤギ

わたしの隣人、羊たち

ワイマテ宣教所にあった農場の風景。キブリアン・ブリッジ（1807―1885）によるスケッチ。提供 アレキサンダー・ターンブル図書館、ウェリントン、ニュージーランド（Ref. PUBL-0144-1-330）.

ニュージーランド、牧羊の二世紀

ピーター・マシウス　民博 民族社会研究部

ひとりあたり一〇頭

ニュージーランドの羊たちは、狭苦しい囲いの中ではなく、広々とした牧草地で放牧されている。南島のサザン・アルプス山脈の広大な牧場で大きな群れとして飼われている例もあれば、もっと小規模にほかの家畜と一緒に飼われている場合もある。

今から二〇〇年前の一八一四年、イギリス人宣教師のサミュエル・マースデンが、ニュージーランドに最初の羊を連れてきた。一八三一年、マースデンの要請によってワイマテ・ノースにモデル牧場がつくられたが、その創設者となったのは、篤農家であり宣教師であったわたしの祖先、リチャード・デイヴィスである。その後一九世紀を通じて、オーストラリアやイギリスからさまざまな品種の羊が次々にもたらされた。今日のニュージーランドの牧羊・羊毛産業の基礎はこうして築かれ、今では四〇〇〇万頭の羊が飼われている。これはじつに、ニュージーランド人ひとりあたり、一〇頭の羊を飼っていることになる。

深刻な自然破壊

毛皮の供給源として羊と同様にもたらされたのが、小型の有袋類であるオーストラリア・ポッサムである。ポッサムは原生林のなかで急速に繁殖し、今ではニュージーランドじゅうに住みついている（余談だが、ごく最近になって、ポッサムの毛と羊毛を撚りあわせることによって、より高品質な毛織物をつくる技術が開発された）。しかしながら、牧草地をつくるための伐採によって、原生林は著しくそこなわれた。羊やその他の家畜、それにポッサムが増えすぎたことで、ニュージーランドの自然環境は深刻な問題に直面している。家畜の排せつ物と化学肥料の混合物が牧草の堆肥にもちいられているのだが、これが牧草地から染み出して水を汚染しているのである。また、残された原生林もポッサムに林冠を食べられてしまい、衰えゆくいっぽうだ。ニュージーランド人は羊と羊毛、それに羊肉を愛してはいる。しかし、生態系のバランスを考慮して牧場経営をおこなうべきだという声が高くなっているのも、事実なのである。

集めてみました世界の

菅瀬 晶子（すがせ あきこ）　民博 研究戦略センター

ウチとソトを隔てる門はそれ自体が結界であり、災厄をウチに入れないという重要な役割を担っている。それゆえ門飾りは単なる装飾品ではなく、魔除け、あるいは福招きの意味合いがきわめて強い。門松とクリスマスリースがどちらも常緑樹を使うのは、その生命力にあやかってのことだ。植物のほかにも、呪術的な力を宿す動物の姿や文字の力を借りて、門飾りは魔を払い福を招いてきた。今日もどこかで、さまざまな門飾りが、家の持ち主を守っているのである。

※寸法の単位はセンチメートルです。

エジプト
ファーティマの手とよばれる、邪視よけ用のお守り。ドアの裏側や上、車のバンパーなどにつけられる。邪視よけとしては、ほかに青いガラス製の目玉もよく用いられる。西アジア展示場にて公開中。
L8.4 x W4.3 x D0.9
H0168553

日本（愛媛県）
オカケダイとよばれるしめなわ。ぴんと跳ね上がった縄は、愛媛県でよく水揚げされるタイをかたどっているのだろうか、それとも大漁の漁船だろうか。日本の文化展示場にて公開中。
H61 x W51 x D14
H0037025

インド
グジャラート州のもの。モスクの扉で、コーランの文言が彫刻されている。イスラーム圏では、聖典コーランの特定の文言が強い魔よけの力をもつとされている。3月19日よりリニューアルの南アジア展示場にて公開予定。
H274 x W273
H0198572

日本（北海道）
アイヌの家屋で窓を守るけずりかけ（イナウ）。けずりかけには多くの種類があり、あるものは神への捧げものとなり、またあるものはそれ自体が神の依り代ともなる。
H11 x W14 x D48
H0003211

インドネシア
スマトラ島の穀物の扉。女性の乳房とヤモリの彫刻がほどこされている。
H100 x W47 x D27
H0127249

カメルーン
バミレケの家屋の出入り口にもうけられた木枠。人物と顔、四足動物の彫刻がほどこされているが、スマトラ島のものと類似しているのが興味深い。アフリカ展示場にて公開中。
L226 x W110 x D39
H0205116

中国
チワン族のもの。福を招くためのオーソドックスなこの飾りは、日本でも中華料理店などでおなじみ。「福が降ってくるように」という願いをこめて、天地さかさまに貼られていることも。
L48 x W48
H0215649

タイ
北部の山地民アカの村の入り口に立つ門柱。まじないのための呪標がつけられている。3月19日よりリニューアルの東南アジア展示場にて公開予定。
H230 x W200
H0121887

ニュージーランド
マオリの倉庫（パータカ）の模型。入り口を精霊が守っている。オセアニア展示場にて公開中。
H320
H0008069

年末年始展示イベント「ひつじ」
2015年の干支である「ひつじ」をテーマに、ひつじや山羊が人びとと、どのようにかかわってきたのかを、資料や写真パネル、映像を用いて紹介します。
会期　2015年1月27日(火)まで
会場　本館ナビひろば

■関連イベント

◆ギャラリートーク
日時　1月10日(土)
11時～11時20分、14時30分～14時50分
解説　野林厚志（本館 教授）
会場　本館ナビひろば
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

◆ワークショップ
「ゴシゴシ☆フェルト――ふわふわ羊毛が大変身?!」
日時　1月12日(月・祝)
11時～、13時30分～、15時～、
（各回60分程度）
会場　本館第5セミナー室（定員各回12名）
※当日受付、先着順、参加無料、6歳未満の方は保護者同伴で参加してください。

◆みんぱくミュージアムパートナーズ企画
「おりがみで遊ぼう！～干支シリーズ「未」～」
日時　1月12日(月・祝)
11時～、11時30分～、13時～、
13時30分～、14時～、（各回30分程度）
会場　本館エントランスホール（定員各回10名）
※当日受付、先着順、参加無料

「えとの未で絵馬を描こう！」
日時　1月18日(日)10時～16時（随時受付）
会場　本館エントランスホール（定員100名）
※当日受付、先着順、参加無料（要展示観覧券）

「干支にちなんだ西アフリカの昔話を語る」
日時　1月18日(日)
11時30分～12時、14時～14時30分
会場　本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

研究公演
「じゃんがら念仏踊りみんぱく公演」
じゃんがら（福島県に伝わる独特の念仏踊り）の披露のほか座談会も行い、復興に向けた人びとの思いについて考えます。
日時　1月24日(土)13時30分～15時30分
（開場12時50分）
会場　本館講堂（定員450名）
※参加無料（要展示観覧券）、要事前申込、申込締切1月8日（木）必着

みんぱくワールドシネマ
「もうひとりの息子」
湾岸戦争の混乱の中で赤ん坊を取り違えられたイスラエル人とパレスチナ人の一家の動揺と葛藤を描きます。
日時　2月28日(土)13時30分～16時30分
（開場13時）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、先着順、要展示観覧券
※当日11時30分よりナビひろばにて展示場ミニレクチャーを実施します。

国際フォーラム
「中国地域の文化遺産――人類学の視点から」
中国地域における有形・無形の文化遺産に焦点を当て、遺産認定が人々の生活にもたらした影響を考えます。
日時　1月24日(土)10時～16時30分
1月25日(日)10時～16時
会場　本館第5セミナー室
言語　日本語（一部中国語通訳）
※参加無料、申込不要
お問い合わせ
heritage@idc.minpaku.ac.jp

公開フォーラム
「古代文明の生成過程――エジプトとアンデス」
考古学者を招いて、最新の調査成果とともに、両古代文明の特性について、討論します。
日時　1月25日(日)13時～16時
会場　JPタワーホール&カンファレンス
ホール1（東京）
※参加無料、申込不要、先着順
お問い合わせ
se.kiken@idc.minpaku.ac.jp

国際フォーラム
「紛争地の文化遺産と博物館」
現地の人びとによる遺産継承という視点から、博物館と現地コミュニティのあらたな関係を構築する方法を考えます。
日時　2月7日(土)13時30分～16時20分
会場　本館第4セミナー室
※参加無料、要事前申込
お問い合わせ・お申し込み
cultural_heritage@idc.minpaku.ac.jp

研究フォーラム
「持続可能なIPMに向けて――博物館環境データの分析手法を考える」
博物館の環境調査から得られる膨大なデータの効率的・長期的視点での分析手法について保存科学者、学芸員がともに考えます。
日時　2月20日(金)13時30分～18時
会場　本館第5セミナー室
※参加無料、申込不要

国際シンポジウム
「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」
各国の歴史的・社会的・文化的背景に即して、発展、成熟する博物館研究とその実践事例を共有し、アジア独自の博物館・博物館学のありかたを議論します。
日時　2月21日(土)9時30分～16時30分
2月22日(日)9時30分～17時30分
会場　本館第4セミナー室
※参加無料、申込不要

みんぱく創設40周年記念　カレッジシアター
「地球探究紀行」
10月からプログラムをさらに充実、参加しやすいスタイルで後期講座がスタートしました。
時間　13時～14時30分
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込（参加状況により当日受付あり）、参加費各回1000円
主催　産経新聞社
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団

1月14日(水)
オーストラリアを旅する――カンガルーからブーメランへ
講師　久保正敏（本館 教授）

1月21日(水)
南米アンデス文明の遺跡を巡る考古学者と盗掘者との闘い
講師　関雄二（本館 教授）

1月28日(水)
多民族共生を考える――ベトナム西北部の人々のくらしから
講師　樫永真佐夫（本館 准教授）
お申込み・お問い合わせ
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

みんぱくゼミナール
時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は観覧料が必要です）

第440回　1月17日(土)
デジタルアーカイブズの楽しみ――文化遺産オンラインから事業史錦絵絵引まで
講師　丸川雄三（本館 准教授）

実業史錦絵絵引
衣喰住之内家職幼絵解之図

情報技術の進展にともない、文化財を取り巻く高精細画像や電子書籍などのデジタルアーカイブを活用した情報発信が広がりを見せています。2004年に一般公開され、その先駆けとなった「文化遺産オンライン」をはじめ、民俗研究資料を高精細画像や解説とともに閲覧できる「実業史錦絵絵引」などのウェブサービスを紹介します。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
時間　14時30分～15時30分
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

1月11日(日)　本館ナビひろば
ドイツのクリスマス・ピラミッド
話者　森明子（本館 教授）

1月18日(日)　本館中央アジア展示場
北方の織布と織機
話者　佐々木史郎（本館 教授）

1月25日(日)　本館東南アジア横休憩所
中央アジアの嫁入り道具
話者　藤本透子（本館 助教）

●展示ガイド更新のお知らせ
2014年3月に新しくなった東アジア展示の展示ガイド更新版が完成しました。展示ガイド（バインダー形式）をお持ちの方には、無料で差し替え分をお渡しいたします。ミュージアム・ショップにお申し出ください。

●南アジア・東南アジア展示リニューアルのお知らせ
展示リニューアル工事のため、2015年3月18日(水)まで南アジア・東南アジア展示場を閉鎖しています。

●無料観覧日のお知らせ
1月12日(月・祝)成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園（有料区域）を通行される場合、入園料が必要です。
※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

刊行物紹介

■野林厚志 著
『タイワンイノシシを追う――民族学と考古学の出会い（フィールドワーク選書）』臨川書店　2,000円（税抜）

台湾原住民族の村で遺跡の“なぜ”に迫る。どうやって遺跡はできるのか？ 人間の行動とその結果残されるものとの関係を検証し、考古学遺跡の解釈に寄与することを目的とするエスノアーケオロジー。台湾の原住民族社会でイノシシ狩猟に密着し、社会のあり方と狩猟の関係を明らかにするとともに、原住民族の人びとが置かれてきた現実についても率直な語り口で綴る。

■広瀬浩二郎・嶺重 慎 編著
『知のバリアフリー――「障害」で学びを拡げる』
京都大学学術出版会　2,400円（税抜）

2013年6月に開催された「京都大学バリアフリーシンポジウム」の成果報告書。大学における障害学生支援の歴史を振り返り、未来を切り開く新概念として「障害学習＝障害を通じて学びあう事」を提案する。

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会（大阪）
会場　本館第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第438回　1月10日(土)14時～15時
グローバル時代の「知的生産の技術」――フォーラム型博情館の可能性
講師　久保正敏（本館 教授）
梅棹忠夫初代館長は、博物館を博情館と位置づけ、モノ、映像や音響資料の収集とそれらの情報化に力を注ぎました。また、利用者自らが情報を選択・再構築し、自ら「知的生産」を実践する場として、民博が活用されることを期待しました。グローバルな情報収集と利用が日常となった現代は、博物館における資料や情報の集積・利用や公開の手法において、多様な異文化への配慮が特に必要です。「フォーラム型」の情報集積と公開に新たな可能性を見出す、これからの「知的生産の技術」について考えます。

第439回　2月7日(土)14時～15時
都市の婚礼、山村の婚礼――ネパール社会の現在（いま）を結婚式に探る
講師　南真木人（本館 准教授）
王制が廃止されヒンドゥー王国ではなくなったネパール。それでも、カーストと民族（ジャート）の違いは結婚において顕在化します。
ヒンドゥー僧侶や楽師などさまざまな人が関わる結婚式は、社会の伝統と変化が表れる縮図です。本講演会では都市と山村の結婚式に着目し「ネパール社会の現在（いま）」を紹介します。
親族やカースト・民族間の関係性、衣食住や文化継承の在り方など、地域的な違いや変容を包括的に探ります。新規ビデオテーク番組の制作に基づくお話です。

第440回　3月7日(土)14時～15時
いま、焼畑を考える――自然破壊か、それとも共生か
講師　池谷 和信（本館 教授）
※講演会終了後、1月と2月は懇談会、3月は展示場見学会をおこないます（1時間程度）。研究者と、そして参加者同士の交流の時間です。是非ご参加ください。

※国立民族学博物館ミュージアム・ショップの記事は、表紙うらに移りました。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

踊る獅子
――埼田神社の青獅子舞

笹原亮二　民博 民族文化研究部

日本の無形民俗文化財は、行政や研究者らによって指定時点での価値を評価されるが、その後に上演をくり返すなかで変化する。すでに半世紀を経た日本の文化財でも、未解決の論点がある。

先日、島根県出雲市の埼田神社で毎年秋祭りに奉納される青獅子舞を見る機会があった。この獅子舞は、獅子頭の青黒い色から青獅子舞とよばれる。日本の獅子舞は、一匹の獅子を二人以上の演者で演じる二人立と一人で演じる一人立にわかれるが、青獅子舞は二人立の獅子舞である。二人立は全国に数千以上分布するとされ、その点では必ずしも珍しいわけではないが、実際に見るといろいろ考えさせられて興味が尽きなかった。

獅子の手踊り

青獅子舞では獅子頭を頂いた演者が鈴や御幣を持って舞う演目があり、江戸時代に大いに人気を博し、全国各地に獅子舞を広めた伊勢大神楽の強い影響が認められる。それとともに目を引いたのは、「手踊り」という大神楽と系譜が異なる演目が見られたことである。

日本の芸能には舞と踊りの区別がある。舞は一人ないし少数の演者が上半身中心の動作で演じる旋回運動が特徴である。一方、踊りは多数の演者が下半身中心の動作で演じる跳躍運動が特徴で、成立の経緯や歴史も異なる。両者の厳密な区別は必ずしも容易ではないが、実際には、神楽や能は舞、盆踊りや歌舞伎は踊りといった明確な使い分けが見られる。二人立の獅子舞は舞であり、獅子踊りというと東北地方の系統の異なる別の芸能になる。ところがこの獅子舞では、舞とビンザサラを奏する田楽が獅子舞とともにおこなわれている。埼田神社でもかつては三つの芸能が別々におこなわれていたが、王の舞と田楽がおこなわれなくなって、鼻高面とビンザサラが青獅子舞に混入したというわけである。ちなみに、田楽も複数の演者が同じような動作で演じる踊りである。

青獅子舞の手踊り

伊勢大神楽の摺りザサラ

宇波西神社の王の舞

福井県宇波西神社の田楽

獅子がバンナイとよばれる鼻高面の役とともに、手を捏ねるような動作の手踊りを踊っていたのである。これまで方々の二人立の獅子舞を見てきたが、手踊りを踊る獅子は記憶になかった。

獅子舞とビンザサラ

獅子舞に鼻高面の役が登場するのは珍しいことではない。伊勢大神楽でも鼻高面の役が登場し、ササラを奏して獅子とともに舞う。青獅子舞でも登場し、ササラを奏して獅子とともに舞うが、ササラが異なる。伊勢大神楽で用いられるササラは、刻み目を付けた竹を摺って音を出す摺りザサラなのに対し、この獅子舞では、紐でつないだ木片を打ち合わせて音を出すビンザサラなのである。

埼田神社には古い三点のビンザサラが残されている。山路興造氏は、芸能史的に見ると、それらは中世に流行した王の舞・田楽・獅子舞といった祭りの芸能のセットに由来する可能性があるという。福井県若狭地方の祭りでは、現在も鼻高面の王の舞とビンザサラを奏する田楽が獅子舞とともにおこなわれている。埼田神社でもかつては三つの芸能が別々におこなわれていたが、王の舞と田楽がおこなわれなくなって、鼻高面とビンザサラが青獅子舞に混入したというわけである。ちなみに、田楽も複数の演者が同じような動作で演じる踊りである。

歴史の中の獅子舞

このように、現在の青獅子舞は、中世の王の舞や田楽、江戸時代の伊勢大神楽や手踊りといったそのときどきの芸能の影響を受けてさまざまに変化してきた結果といえるが、変化はそれに止まらない。昭和三八年（一九六三）の本田安次氏の報告によれば、当時の獅子頭は赤く、その四〇年程前までは獅子が二匹出ていたという。こうしたことは、この獅子舞が、中世や江戸時代から現在にいたるそのときどきの演者たちの、必ずしも自覚的ではない趣向の選択によって、不断に変化を来しつつ演じ続けられてきた歴史的存在であることを示している。

青獅子舞は昭和三五年（一九六〇）、島根県の無形民俗文化財に指定された。それは、この獅子舞が将来的に保存し継承すべき価値を有することが、行政や研究者らによって公式に保証されたことを意味する。しかし、そもそもそれが不断に変化する歴史的存在であるとすると、ことはそう単純な話ではなくなる。というのも、文化財の指定においては、将来的にその獅子舞のどの時代の何をどう保存し継承すればいいのか、それを演者以外が決めてもいいのかといった重要な問題が、未解決のままであったことになるからである。近年は文化財に代わって文化遺産という新しいことばを目にするようになった。それは、そうした問題を解決に導いてくれるのであろうか。

多文化をあきなう

ソーシャル消費と認証制度

長坂寿久（ながさかとしひさ）
拓殖大学客員教授／逗子フェアトレードタウンの会

消費者が商品を選択する基準は多様である。最近では、人や社会、環境への配慮など社会的（ソーシャル）貢献や、倫理的（エシカル）な問題の解決につながるということが、購入の際の重要な要素となりつつある。商品の製法や流通を一定の基準によって定めた認証制度はその選択の手助けとなる。

マックス・ハーフェラール

一八六〇年にオランダのダウエス・デッケルが書いた小説『マックス・ハーフェラール』は、インドネシア研究者なら知っているに違いない。オランダ東インド植民地（現在のインドネシア）における非人道的で過酷な統治の実態と、虐待、搾取、そして貧困、飢餓の実態を現地滞在経験に基づき描き、一九世紀最大の問題作として国際的に知られてきた小説である。世界のアンフェアな〝あきない（貿易）〟の実態を告発したこの本は、オランダ人にとっては、「良心の書」として読み継がれ、開発協力への原点となってきた。

一九八八年一一月一五日、この英雄の名を冠したマックス・ハーフェラール（以下MH）財団は、フェアトレード・コーヒーの認証制度をスタートさせ、同財団のシール（図1）のついたコーヒーをオランダ全国の多くのスーパーマーケットの棚に置くことに成功した。

筆者がユトレヒトに本部のあるこの財団を最初に訪問したのはそれから五年後の九四年初めだったが、全国スーパーの九〇パーセント以上に置かれ、今年中にバナナの認証制度をスタートさせるのだ、ついにわたしたちの夢がかなったのだと興奮気味に話してくれたのを印象的に覚えている。

ふたつのフェアトレードラベルの発展

開発途上国の提携先から仕入れた商品を自分たちが運営する専門店（ワールドショップ）で販売するだけでは、人びとはフェアトレード商品を買いたくてもそれと出合う機会が限定され、大きな販売の増加も望みにくい。そこで彼らが夢見たのは、全国のスーパーの棚にフェアトレード商品が並ぶということであった。そのためにはどうすればよいか。フェアトレードの国際認証制度は、こうしたフェアトレード活動家たちの夢から生まれてきたのだ。

オランダのMH財団方式は数年の内に欧州各国へ波及していった。まず九一年にベルギーと英国、九二年にフランス、九三年にドイツ、そしてオーストリア、デンマーク、イタリアなど。その後オーストラリア、カナダ、アメリカ、日本へと広がっていった。なおベルギーとフランスなどでは、オランダ同様MH財団と名乗っている。

オランダからスタートしたこの認証方式は、各国で独自の発展をしていくが、九七年に国際ネットワーク組織としてFLO（現在の国際フェアトレードラベル機構、Fairtrade International、以下FI）を設立し、次第に制度の調整と統一を図っていくことになった。そして、ロゴ（ラベル）も〇二年までに現在のもの（図2）に統一することになった。

フェアトレードは、先進国のフェアトレード団体と途上国の生産者団体とが直接提携して取り組む形（いわゆる提携型）が基本となってきた。提携型の国際団体として八九年にIFAT（オルタナティブトレード国際連盟）が設立され、現在ではWFTO（世界フェアトレード機関）へと発展している。同機関の加盟団体はフェアトレード専門団体として独自のマーク（図3）の使用が認められる。団体認証のWFTOと商品認証のFIとの両立によって、フェアトレードは新しい興隆を迎えることになった。

エシカルとフェアトレード

とくにオランダのマックス・ハーフェラール財団から始まり、国際認証制度FIへの発展は、企業がこのシステムを使うようになり、フェアトレード市場は認証品を中心に大きく伸び、二一世紀に入ると世界でもっとも高い伸び率を示す小売市場のひとつとなった。認証制度によって、企業は自ら生産者とかかわることなく、フェアトレード商品を扱うことができるようになったからである。もちろんこの背景には、CSR（企業の社会的責任）などへの関心の高まりもあろう。

しかし、その故にもうひとつの動きとして、企業がより取り組みやすいように、ウッツ（図4）、レインフォレスト・アライアンス（図5）など、独自の基準を設定した認証制度が登場するようになった。そしてさらに社会貢献や倫理的であることをアピールする「ソーシャル」「エシカル」商品への関心が国際的に高まるとともに、多くの認証制度が登場するに至っている。

ちなみに、英エシカル・スーパーストア・ドット・コムのホームページをみると、エコから人権、動物保護からベジタリアンまで、多くの認証制度とロゴであふれている。英国ではエシカル商品とは、認証制度がしっかりあり、その認証をとっていることを前提としていることがわかる。

日本でもエシカル商品のブームが訪れつつある感があるが、その定義、意味づけはじつは依然としてあいまいであることが問題となるだろう。そして、このふたつのフェアトレードラベルは多くのエシカル認証制度のなかでもっとも包括的で厳しいものとなっていることが、エシカルの過剰な多様化を通して、再び意味をもつ時代となるだろう。

マックス・ハーフェラール財団が導入した認証制度は、グローバル市場に向けてフェアトレードを本格的に登場させる契機となったというだけでなく、多文化を超えたグローバルなソーシャル市場形成をもたらす手段ともなってきたのである。

ダウエス・デッケル

さまざまな認証ロゴが並ぶ
アメリカのチョコレート（撮影・鈴木紀）

図1　オランダ・マックス・ハーフェラール財団の認証ロゴ

図2　FI（国際フェアトレード認証ラベル）の商品認証ロゴ

図3　WFTO（世界フェアトレード機関）の団体認証ロゴ

図4　ウッツ（グッドインサイド）のロゴ

図5　レインフォレスト・アライアンスのロゴ

認証されたコーヒーを出す
アメリカのレストラン（撮影・鈴木紀）

味の根っこ

ネパール、マガール人の豆コロッケ

バーラ

南 真木人（みなみ まきと） 民博 文化資源研究センター

サラノキの葉の器にもられたバーラと豚肉（2014 年）

ほのかな塩味

中部ネパールのマガールという人びとのごちそうは豚肉とバーラである。バーラはマガール語でテーツォ、ネパール語でカーロ・マースとよばれるケツルアズキを水でもどし、よくつぶしてラード（豚脂）で揚げたドーナツ形の軽食だ。ケツルアズキはあまりなじみがないかもしれないが、南アジア原産の黒いダール（豆汁）にする豆であり、日本ではもやしの原料として使われることがある。バーラはミニドーナツのように見えるが甘くなく、ほのかな塩味がする。少し黄色いのはウコンを入れているからだ。わたしの調査地ナワルパラシ郡ではバーラとよばれ、隣のパルパ郡のマガール人はバトゥックとよぶ。

祭りのごちそう

村でバーラを食べる機会は年に数回ある。なかでもバーラの日とされるのはマーグ・サンクランティという祭りの日だ。これはマーグ月（西暦一月中旬～二月中旬）の第一日（同一月一五日ごろ）に開かれる祭りで、太陽がマカラ（マーグの語源）宮に入り、吉祥の季節を迎えることを祝う。村の人は祭りの由来などあまり気にとめず、妻ないしは母の実家に家族全員が招かれ、バーラなどのごちそうを食べる日だという。祭りの朝、前日揚げたバーラは酒などとともに手土産とされる。どの家にも自家製のバーラの他に、よその家で作られた味も形も、揚げ色も異なるバーラが集まる。もっとも美味しいとされるのはケツルアズキだけで作ったもので、小麦粉など混ぜものをしたものや、緑豆（ムング・ダール）で作ったものは評価がさがる。主婦はよその家のバーラを味見しては、何某（なにがし）の家のは美味しいとか、あの家はケツルアズキが不作だったのかしらなどと噂（うわさ）する。

結婚式のごちそうには必ずバーラと豚肉（2014 年）

色とりどりのバーラ

バーラを食べる機会のもうひとつは結婚をめぐる行事においてである。花婿側の親族が花嫁の家に正式に女性を求めにいく、いわゆる日本の結納にあたる日、花婿側は二〇〇個以上のバーラと酒、ヨーグルトなどを持参する。その際、バーラは新しく編んだ平たい竹かごふたつにびっしりと詰めていく（このバーラかごはその後も魚を入れて干したり、少し広げて鶏を入れて持ち運んだりするのに使い続けられる）。

結婚式当日のごちそうでもバーラは欠かせない。サラノキの葉で編んだ器には、ふつう一〇～一二個のバーラと豚肉のおかずが入っており、誰も手をつけていない清浄の印としてサラノキの葉で封がされている。小さめの結婚式でも約二百人の招待客が集まるので、二千個以上のバーラが用意される。それらは花婿の父系の親族が持ち寄ったものだ。こうして味、色、形とりどりのバーラが招待客に出されることになる。バーラは家々のあいだをめぐり、家と家をつなぐ社会的な食べものなのである。

ところで、バーラは一度にたくさん食べるものではない。多くても七、八個にしておく方がよいといわれる。生のアズキをつぶして揚げているので、なかまで火がとおっていても消化に悪いからだ。こうして食べ残したバーラは、孔（あな）に木綿糸をとおして室内にぶらさげておく。そこは豆だ、数日すると、なかが発酵し納豆のように少し糸がひくようになる。これをおき火で軽くあぶって食べるのもまた格別だ。

豆食文化へ

マガール人の祭礼食としてなくてはならないバーラ。だが、じつはこれとよく似たものがインドにもあり、バダ（バラ）とよばれる。原料は同じケツルアズキ（ヒンディー語ではウラド・ダール）で、違いはトウガラシや玉ねぎなどの刻んだものが生地に入っていることだ。またインドでは、バダの上にヨーグルト（ダヒ）やスパイスをかけたダヒ・バダが軽食の定番だ。マガールの伝統食のように思えるバーラが、「大インド」のバダの起源だなどというつもりはない。だが逆に、バトゥックという別名があり、ケツルアズキもマガール語固有の名があることから、バダがバーラに先んじるというのも容易に説明できない。ここは伝播論（でんぱろん）に与（くみ）するよりも、多元的に発生した類似した豆食文化と考えるほうがよさそうだ。何あろう、この連載の最初で紹介されたアラブのファラーフェルも、豆の粉の生地を揚げた塩味の軽食という点で広く共通するのである。

葉の上でバーラの形を作り揚げる（2012 年）

木串にとおして油をきる。油はラード（2000 年）

バーラ（bada）の作り方（4、5 人分）

挽き割りの黒いダール	250g
塩	少々
ウコン	少々
ラードまたは揚げ油	

※日本のネパール料理店のなかには、ネワール人式のバーラを出すところがある。こちらも原料はケツルアズキだが、よりゆるい生地にしてパンケーキのように両面焼いたもので、マガールのバーラとは食感が異なる。

① 輸入食材店などで入手できる挽き割りの黒いダールを一晩たっぷりの水につけておく。

② 手でよくもんで、豆の黒緑色の外皮を水面に浮かせては捨てることを繰り返し、豆の白い部分だけにして水をよくきる。

③ すり鉢またはフードプロセッサーでよくつぶし、パン生地より少し柔らかい状態にして、塩とウコンを加える。

④ 塩とウコンを入れた水で表面を濡らした葉（日本では柿の葉）を掌に置き、その上に適量の生地をのせ、同じ水で濡らした人差し指で真んなかに孔をあけながら成形する。

⑤ 葉から油に滑り落とし、なかまで火がとおり茶色くなるまでゆっくり揚げる。

下からの

人間学のキーワード

サバルタン

Subaltern

井坂理穂（いさかりほ）　東京大学准教授

サバルタンは従属的な状況におかれた人びとを示すことばとして、現在では学術書やメディアのなかで広く使用されている。もともとは軍隊における下位の士官を指すための用語である。このことばが広まったきっかけは、一九八〇年代初め、ラナジット・グハをはじめとする南アジア近代史研究者たちが、サバルタンの概念を掲げて歴史記述を再構築する試みを始めたことにあった。彼らは、イタリアのマルクス主義の政治思想家アントニオ・グラムシによるサバルタン諸階級の歴史に関する議論に刺激を受け、従属的な状況におかれた人びとの意識や政治を明らかにすることを目指した。ここでいう従属には、階級、カースト、年齢、性別、職業その他、さまざまな性質のものが含まれる。これらの歴史家たちにとって、サバルタンの概念は、階級やプロレタリアートといったことばではとらえられない支配・被支配関係をあらわすうえで有効であった。彼らはそれまでの歴史記述がエリートの視点から描かれているとして、サバルタンの主体性や自律性を強調し、エリートの政治領域とは異なる彼らの政治領域に焦点を当てることで、「下からの」歴史記述を試みる。たとえばグハは、農民反乱の研究において、反乱を起こした人びとの宗教的なことばや行動、儀礼、噂などに着目しながら、彼ら固有の意識を描き出そうとした。

このような南アジア近代史における新しい歴史記述の試みには、批判の声も寄せられ、そのなかでサバルタン研究の方向性も変化していく。たとえば、実際にはエリートとの関係において流動的で曖昧さをもつ集団であるはずのサバルタンが、ともすると固定化した実体として描かれることへの懸念や、サバルタン内部の一体性を想定しているかのような記述への批判もあった。さらに、「サバルタンは語ることができるか」との根源的な問いも投げかけられた。この問題を提起したG・C・スピヴァクは、サバルタンが無力化され沈黙させられてきたことを認識する必要性を示した。また、サバルタンのなかでもいっそう影のなかに隠されている女性の存在への注意を促した。

一九八〇年代後半以降、サバルタン研究にかかわる歴史家たちのあいだでは、サバルタンの主体性や自律性を描くというよりも、むしろ彼らの声が支配的言説のなかでいかに抑圧され、隠されているかに関心が向けられるようになった。植民地期のエリートの国家・国民概念、宗教・カースト認識、ジェンダー観、歴史観などに関する言説分析が活発におこなわれ、サバルタン研究はいまやエリートについての研究になったとの批判も寄せられたほどである。ポストオリエンタリズム、ポスト植民地主義などの思想潮流と連関しながら、そこではヨーロッパ史を基準とした進化論的歴史記述への批判なども提起されていく。こうした流れのなかで、サバルタンの概念は、南アジアや歴史学という枠組みにとどまらず、さまざまな地域や学問分野の議論で用いられるようになる。

異聞逸聞

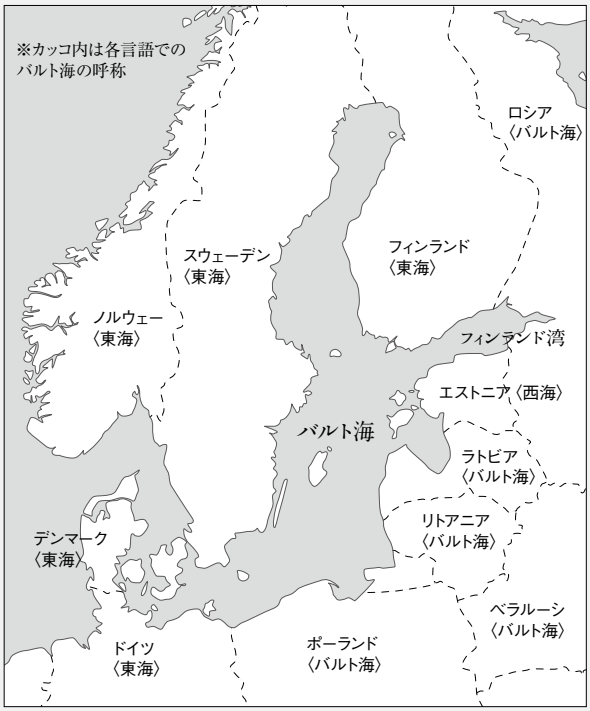
もうひとつの「東海」

庄司博史（しょうじ ひろし）　民博 民族社会研究部

バルト海を囲んで

いま日本と韓国のあいだでは、韓国が「日本海」という名称に代わり自国語での「東海」（トンヘ）を国際的に認めさせようとしていることで、主張が対立しているが、ここではヨーロッパのバルト海をめぐっての話である。

バルト海を囲む国が多いなか、「バルト」を用いるのはバルト海南岸のポーランドからバルト三国のうちラトビア、リトアニアとロシアにかけてで、ドイツではオストゼー（東海）とよばれている。いうまでもなくドイツからみて東に位置するからであるが、この「東海」に由来する名称はドイツ語にならって北欧のノルウェー、デンマーク、スウェーデンでも用いられている。おもしろいことに、自国からみてバルト海が東ではなく西に位置するフィンランドでも、おそらく長くスウェーデンの支配下にあったためか、イタメリ（東海）が用いられており、それへ異議が唱えられたことなど聞いたことはない。



西か東か

バルトといえば昨年引退したエストニア出身の元大関、把瑠都（ばると）を思い浮かべる人もいるだろう。このしこ名はエストニアが臨むバルト海にちなんでつけられたのだが、じつは、当のエストニアではバルト海とはよんでいない。では歴史的に関係の深いドイツやフィンランドのように「東海」か、というとそうでもない。エストニア語でバルト海はレーネメリといい、その意味は「西海」。つまり自国の西側に位置する海を理屈に基づいてよんだだけである。小国エストニア一国のみが、自国の西側に位置するバルト海を「西海」と名付けてがんばっていることになる。これが文献に現れだした一九世紀中葉まで、「東海」に由来する名称もあったようだが、長く文化的支配下にあったドイツや当時の支配国ロシアに逆らってでも理屈を通したのは、当時の民族意識の高揚ともかかわりがあるのだろうか。

名称と国際問題

ところで、このバルト海の東端にはフィンランド湾がある。フィンランドとエストニア、ロシアに囲まれ、三国にとっては生命線ともいえる重要な海路となっているが、こちらの方はすべての国で「フィンランド湾」という名称が共有されている。国際水路であるのは明確だが特定国の名称がはいっているといって論争のもとになっているわけではないようだ。

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

箱根駅伝のユニフォーム

日髙 真吾　民博 文化資源研究センター

モチ食べすぎ、酒飲みすぎて、あとは炬燵でミカンでも、とテレビをつければ目の前に、
小雪舞う峠道を疾走する、ランニングシャツに短パン姿の韋駄天たち。
制服なんて、野暮なことばはいけない。
あの屋外真冬の極薄ユニフォームがどれだけ熱く、またどれだけ重いことか。

日本の正月の風物詩

毎年、一月二日、三日におこなわれる箱根駅伝。正式な名称は、「東京箱根間往復大学駅伝競走」という大会である。一九二〇年にはじまり、二〇一五年の大会で第九一回の大会となる。全国放送もされ、視聴率も高く、沿道にも一〇〇万人以上のファンが応援に駆けつけるこの大会は、日本の正月の風物詩ともなっている。

名誉のユニフォーム

この駅伝に、わたしは第六九回大会（一九九三年）、第七〇回大会（一九九四年）に選手として出場した。大学三年生の第六九回大会では四区を任され区間一五位（一五校中）という散々な結果で、大学四年生の第七〇回大会では一〇区を走り、区間三位（二〇校中）というまあまあの成績であった。なお、全体の成績は五位入賞であった。

毎年、箱根駅伝を目指して、全国の高校生アスリートがこれに出場できる大学に集結する。大学は在籍する選手が少しでも良い成績を収められるよう手厚いサポートをしてくれる。郷里の家族や友人は、選手として選ばれるように、また晴れて選手に選ばれたら任された区間をしっかり走れるように、一生懸命、応援してくれる。それを受けてわたしたち選手は、チームメートとしのぎを削って一年間をかけて切磋琢磨する。

箱根路を走る筆者（第 70 回大会）

箱根駅伝のユニフォームは、一年間をとおして、チーム内の競争に勝ち残った選手のみに支給される。わたしが選手だった当時、母校の東海大学は、陸上部全体の水色を基調とした統一ユニフォームではなく、白地に紺の十字をあしらった箱根駅伝用のユニフォームを着て、大会に臨んでいた。わたしはこのすっきりとしたデザインのユニフォームに大きな憧れを抱き、このユニフォームを着て箱根駅伝を走るべく、東海大学への進学を希望した。このユニフォームを手にしたときの誇らしさとうれしさは、二〇年を経た今でも忘れられない。そして、このようなユニフォームへの強い思いは、出場校のどの選手も同様であり、大学の名誉をかけて、激しい競争を繰り広げ、襷をつないでいくのである。

色々な人の想いを背負って

当時の東海大学のチームには、一〇〇名前後の選手が在籍しており、このなかで選ばれた一〇名のみが箱根路を走ることができた。一生懸命に真面目に練習していても、チーム内の競争で勝ち残れなければ、箱根駅伝のユニフォームに袖をとおすことは許されない。そこには非情な競争原理が働いている。走れないチームメートは、出場できる選手の付き添いとして、選手をバックアップする。また、付き添いとなった選手の肉親や友人は、出場するチームメートの選手を応援してくれる。したがって、箱根駅伝のユニフォームを着るということは、夢の叶わなかったたくさんの仲間や関係者の想いも背負うこととなる。一九歳から二三歳の若さで、このような色々な人の想いを受け止めなくてはならない。このユニフォームは想像を超えたプレッシャーとなって選手を襲うのだ。

温かい声援を

二〇一五年を迎え、九一回目の箱根駅伝が開催される。そこには、プレッシャーをエネルギーに変えて快走する選手、プレッシャーに負けないように頑張る選手、プレッシャーに押しつぶされてブレーキをしてしまう選手がいることだろう。

ただ、そのような競争の向こうには、箱根駅伝のユニフォームを着ることができなかったたくさんの学生ランナーが、母校のユニフォームが少しでも前を走れるよう、身を粉にして選手とともに戦っていることも感じていただきたい。わたしもサポートしてくれたチームメートを思い出しながら、声援を送りたいと思う。

第 70 回箱根駅伝に出場した
東海大学のユニフォーム

箱根駅伝で使用される
襷（たすき）

月刊みんぱく 2015 1月号

編集後記

11月中は暖かかったが、12月に入り、急にすこぶる寒くなった。この新年号が出るころまでに、特別展「イメージの力」は閉幕し、展示物は燻蒸されたうえで、もとの保管場所に戻ってゆく。章ごとにさまざまな切り口で、地域横断的にモノを展示するという企画はこれまでにみんぱくではあまりなく、こういう展示をもっとやってくださいという来館者のお声を多くいただいた。実行委員として関わったイベントの際の質疑応答でも「人の死、モノの死」や「時間」などについて、お客さんと一緒に、哲学的なところにまで踏み込んで考える機会が何度かあった。人間がモノに込める願いや思いの本質に迫ることができたのかもしれない、という感触が得られた。

そしてみんぱく創設40周年も無事終わり、新たな年が明ける。馬の年はなんだか突っ走って、忙しかった気がする。羊の年はもう少しゆとりができるだろうか。毛糸を紡ぐように、地道に進みたい。

（山中由里子）

●表紙：男性用帽子
地域：トルクメニスタン　標本番号 H0168476（白）、H0168477（黒）

次号の予告

特集

地球人が宇宙人になるとき

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00～17：00）

月刊みんぱく 2015年1月号
第39巻第1号通巻第448号　2015年1月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　河合洋尚　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　丸川雄三
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology